

# UIFA JAPON NEWSLETTER

「海外交流の会」の報告  
 中国「ヤオトン」住居と環境共生  
 UIFA' 98 記録ビデオ『堂々完成！！』  
 ザ・ドキュメント  
 UIFA HOMMAGE  
 役員会の報告  
 「この指とまれ」の報告  
 「この指とまれ」 ハワイのホスピタル訪問のお誘い

## ■「海外交流の会」の報告

山田 規矩子

1993年4月の第1回「海外交流の会」からほぼ年3回のペースで開催して6年目、今度の3月の会で17回目になります。

会の名前の通り、海外からの来訪者のお話の会、日本人講師の場合は海外での経験や海外の情報を話して頂く会、としていました。1998年は今迄と違って、9月のUIFA 日本大会のテーマに合わせて「環境」をテーマとする会としました。3月の〈都市と環境〉、5月の〈人と環境〉、7月の〈建築と環境〉に続き、UIFA JAPON “環境年”を、中国の環境共生住宅「ヤオトン」のお話で締括る事になりました。

## ■ 中国「ヤオトン」住居と環境共生

吉野泰子

ヤオトン(窯洞)とは、中国黄土高原に分布する伝統的地中住居で、現在も4000～5000万人が住むという特筆すべき建築です。

改革開放政策により農民の経済水準が向上する一方、青年層の都会への流出が危惧されることから、農村の生活環境を若者に魅力あるものに改善する為、中国政府は国家プロジェクトとして「窯洞の近代化」を推進し、独自の伝統技術により、「地球にやさしい快適空間」を実現しようとしています。

この新型ヤオトンのモデル設計案で最優秀となったのが、UIFA 日本大会で発表した中国のウェイさんで、西安建築科技大学が当課題を担当し、日大理工グループ(研究代表:吉田燦教授)は地域と地球の環境保全のモデルをアジアから実証していくべく、当プロジェクトを日中の国際共同作業として受け入れることとなりました。

窯洞はもともと、黄土を切りとり、掘ってつくられた生土の洞穴を居住空間としたもので、母親の胎内を思わせるぬくもりややすらぎに、言い知れぬ安堵感、親近感を覚え、住居の本質や sus-

tainable development(持続的発展可能な開発)について再考せざるを得ませんでした。

夏季(平成10年8月)及び冬季(平成11年1月)の調査結果からヤオトンの特徴を簡単にまとめると

- ・屋外の日較差は大。室内は、夏涼しく、冬暖かい
- ・開口部の熱遮断性能が悪い
- ・自然換気量が少なく、換気性能は不良
- ・室内外粉塵量は多いが、CO2濃度は低い

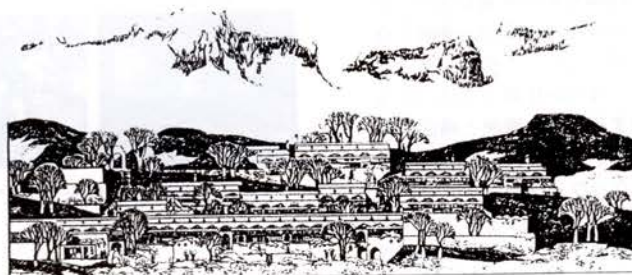
これらは、当該地域で初めて実施された、アンケート調査結果とも一致する傾向が確認されました。そこで、考えられる改造の方向性をまとめると、以下のようになります。

1. 冬暖かく、夏涼しい基本的な熱性能を保持すること。
2. ヤオトン建築の建設費の安さを維持する。
3. 緑化技術の応用・太陽エネルギーの活用・土地の蓄熱(冷)性能の活用・固形廃棄物のリサイクルを図る。
4. 乏しい水資源の再利用方法を確立する。
5. 現地産の煉瓦や石材を基本的な建材とする。

以上のような経緯で、日中共同の国家プロジェクトが既に展開されています。私達は、「人に優しく地球に優しい」人類居住区のモデルを黄土高原から発信すると共に、共同調査により築かれた両校の信頼関係を維持発展すべく、21世紀を担う学生諸氏による交流の発展を願わずにはられません。

Do in Rome as the Romans do(郷に入っては郷に従え)

記憶も新たなUIFA日本大会ですが、21世紀の扉を開くべく、学生のみならず、会員相互が切磋琢磨し、国際人としての素養を磨きたいものです。



## ■ UIFA'98記録ビデオ『堂々完成!!!』



板東 みさ子  
井出 幸子

2年間の準備を实らせたUIFA'98-第12回日本大会-。台風の去来を案じながらも、いよいよ迎えた9月1日。会期とポストコングレスツアー、併せて約2週間の日々が始まりました。

参加者268名(国内154名、海外114名)という盛況の内にそれぞれが有意義に、そして楽しく(細かいトラブルや困難も含めて)新しい仲間や視点やテーマをつくることができたと思います。

汗をかきながら歩き、蟬時雨が聞こえ、噴水の水音が涼やかに感じられた。たった半年前のことですが、季節も移った今、妙に懐かしく感じられます。

漸く完成したビデオですが、映像と音声の効果はさすがで、大会の日々がまたフレッシュに蘇ります。あの日はあんなに大勢集まって乾杯したのだとか、会場風景では発表者の緊張が伝わってくるようだとか、こんな見学のひとこまがあったのかとか、今は懐かしい思いで画面のなかに見つける海外からの仲間達の好奇心溢れる顔々。参加者全員がすべての企画に参加しているわけではないので、自分の知らない場面が見られるのも一興です。

およそ20分の短いビデオですが、参加された皆様をご覧になればその映像から何倍もの多くの記憶が思い起こされるだろうと思います。また、参加されなかった方々にも退屈しないでご覧いただけるよう編集の際には、プロの意見を重んじました。この会議がどのような企画で、どのような参加者が如何に臨んでいたか、そしてどのような方向を共に確認したか、それらをご覧いただけるのではないのでしょうか。

記録と記憶の為に、是非、皆様のお手元に置いていただきたいと思ひます。

実行委員会の各部会ともそうですが、広報・記録・編集部会の準備範囲も結構広く、当日まで何やかやと作業に追われ、ビデオ担当として準備もあまり整わずに会議を迎えたのが現実でした。ビデオ撮影のプロに、ここはこんなシーンを撮ってください、こんなふうに編集されるとよいと思ひます、といったコメントを会議日程表に細かく記入し渡したのですが、「いただいている予算では、こんなところまではいられないのですが…」と言う応えに「・・・」。とにかくこんな視点でできる限りの内容をお願いしなすという曖昧なところで本番に突入。カメラマンの客観的視点での映像も楽しめます。

撮影したビデオは全部で60分テープ約10本分になりました。その豊富な原材料から「20分もの」に編集する作業もなかなかのものでした。作ったストーリーにのる映像はあるか、連続するシーンの整合はとれているか、情景が同じなら、人物はアップと引きが組み合わせられたほうがよい、アングルが片寄ってはいけない、時系列で進めるのか、内容で展開するのか、場面と場面の間のエフェクトはこういう形だ、テロップを入れるのか、それを動かすのか、人名は間違っていないか、バックミュージックは何にするのか、タイトルには何をを使うか、ラストはどうするか、etc, etc. ビデオ制作の会社へ出向き、深夜に至る打合せ作業も幾

度か。やればやるほどやれることはあるのですが、再度の「そこまでの予算は…」の一言が終止符を打ちました。

予算の関係もあって、スタディツアー、ポストコングレスツアーは、広報部会員のホームビデオに依る撮影。「大丈夫です。編集の時にとりこめます。機械の差はそんなにありません。」と言うプロの言葉に勢いを得て(?)ここぞというシーンを撮ったつもり。機械の差は確かにそんなに無いのかもしれないのです。撮り方が問題だったというのが、あとで歴然としました。実行委員の我々は、そのツアーの1参加者であろうが、1カメラマンであろうが、やはり、目配り、気配りの立場から抜けきれないのです。じっと落ち着いてカメラを廻してられない気分が映像にちゃんと映し出されてしまうものです。原材料のテープを井出、板東の両担当者は、全て見ることになり、膨大な量ですから早送りでも何度か見ました。プロの撮影部分は、それで差し支えなかったのですが、アマチュアカメラマンの映像を見終わった時点で、二人は、無口になり、どちらからともなく「車酔みみたいな感じに…」とつぶやいたのです。揺れる映像に目が廻った次第。そんな映像もプロは適宜切り取った形で上手に取り込んでくれたと思います。

最終段階の校正には、広報部会長、デザイン部会長、更には実行委員長にも目を通していただきました。皆さんお忙しい中、時間を割いていただきましたし、我々も交互にインフルエンザに罹ったり、仕事の合間を縫ったりの作業でしたので、でき上がりに際しては、『ついに堂々完成!!!』なのであります。

言語は日本語ですが、映像と音声は、およその内容を伝えてくると思ひます。海外のお友達にプレゼントなさりたい方は、ヨーロッパ仕様、フランス仕様等、変換が必要です。日本の機械に合わせて作ったビデオでは、うまく映りませんのでご注意ください。4月中に担当までにお申し込みいただければ、海外仕様も承ります。(日本版より少し高く3500円/本になります。国別を明示してください。)ご連絡お待ちしております。

3月27日の申込期限に遅れた方も4月中なら、何とか間に合わせられます。この機会をお見逃しなく。

(連絡先:板東TEL/FAX 03-3429-1475)



発表会場風景 展示会場でのパーティー 大会宣言

■ THE DOCUMENT

飯島静江

‘99年2月、ポストに届いた2冊の緑の記録集。

たった6ヶ月前の事。あの日本大会が遙か昔の出来事になりつつある今、この2冊が’98年9月の会議の様々な催し、3年に及んだ準備、そして去年、年末まで続いた報告書作りのドキュメントをまざまざと呼びもどす。

広報部会の責任者として、ありがたくも報告書の編集長の任を賜り、独断と偏見を許すと言うアメと、工期短縮と言うムチを巧みに使いこなす実行委員長と共に、僅か3人（松川さん、アシスタント田村さん、飯島）での第1回編集会議は11月7日、実行委員会解散式までの完成を目指してスタート、12月18日に無事印刷上がり、19日解散式にて配布。超特急“のぞみ”級の報告書作りのあれこれが走馬燈の様に廻り始める。

**目次・執筆:** 大会概要、記録、大会までの記録、資料の4部構成と決め、日程を追いつつ、催しもの毎に括った目次案は、予想以上に作業を捗らせ、目次作りと連動して執筆者が浮び上がる。ほぼ全員が期日どおり原稿をF. D. に収めて送ってくれた事にはいたく感激。

**資料整理・編集:** 受け取った原稿は千差万別。それぞれの個性が強く、熱心のあまりの文字余り、そのまま使えないのは世の常。ここで無情にも切ったり貼ったりの編集者の特権行使。無理矢理所定の枠内にバランス良く、同じトーンで整える厄介な作業に突入。これを支えてくれた編集アシスタントの田村さん。夜となく昼となく整理し、資料を追加し、次の作業の準備を黙々と担当。記述内容の正確を期さねばと担当部長も動員。

**写真:** 大会中、カメラマンが勢力的に撮ったフィルムが約90本、3,000枚の中から、時の雰囲気や伝え、見た目に良く、美男美女に撮られ、臨場感溢れる写真選びは至難の技。大会渦中の人と外から見る人との視点の相違もあって、たった1枚を探し求めて他人のアルバムまで手を延ばす始末。最も体力を消耗した作業。

**校正:** 悪戦苦闘の末、出来上がったゲラ刷り。写真・原稿の員数が整い、よいよ報告書作りも佳境。誤字・脱字、写真・図表の収まりのチェック、校正のプロ田村さんがいるとは言え、中身の責任は編集者にあり。確認のTel, Faxも目まぐるしく、霞む目を見開き、口もきかず、ひたすら活字追っての深夜作業。

冷たい雨の12月5日、スタジオ・サラでの出張校正。女性スタッフと共に終日かんづめ。後は最終ゲラを待つのみ。

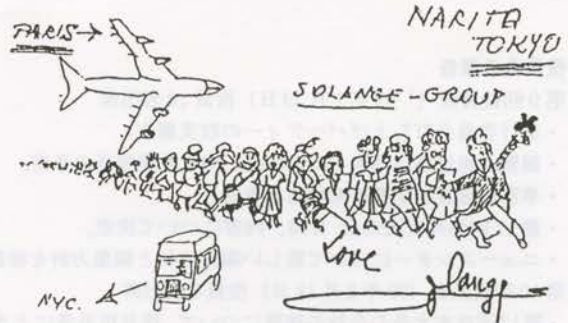
**“E”:** 解散式を明日に控えた12月18日、印刷上がりの報告書に重大な誤字発見。何とUIFA会長名の、“E”と“A”の取り違い。これだけは許されず、E文字のシールを大量に急造、会場に持ち込んでいつもの貼付け作業。

この最後のハプニングを以て報告書作りは終了。

独断と偏見でまとめた大会報告書、出来、不出来共々、諸悪の根元は編集長に有りの言を思い出す。さて、諸悪は何処にありや。

■ UIFA HOMMAGE

平井 美蔓



UIFA国際女性建築家会議第12回日本大会が終り、約半年が過ぎた現在。打合等に使用した経過資料の整理も、とかくの思いですませて、長丁場の登山を終えたにも似た心境の昨今ではある。UIFA会長、ソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥールさんとUIFA JAPON事務局との間で、大会直前にとり交わされた文書のなかの会長直筆のイラストは、ヨーロッパ方面側からの大会参加への期待と願望がユーモアあふれて描かれていて印象的だ。

F ふと「あらこんなところにド・ラ・トゥールさんがいるよ」と誰かが声をあげた報告書編集打合の机上。熱気あふれる展覧会写真の中に思わず肩をたたいて声をかけたくなるような会長の後姿がA あった。報告書の表紙のデザインは、デザイン部会・大高氏のコンgresバッグをベースとして、プログラム・予稿集、会議報告書、展覧会報告書と三位一体の構成。コンgresバッグといえば、H 版下作成にこぎつける迄の、総務部・山本氏とおもてなし部・正宗氏の奔走による広告面のコマ埋めと、そのレイアウトを大高氏共々検討した夜が思い出される。展示担当・高橋氏と報告書の打合O を開始。事務局で立上げられている大綱にそって具体的なレイアウト効果や標記の検討とともに、作品パネルのL判焼付写でその内容を眼光紙背に徹する如くに読解するためには、〈三人寄ればM 文殊の知恵〉の知恵が必要で、ルーベを駆使し、関係者それぞれが現実の展覧会会場に立戻る実感があった。カラー、モノクロ共実際にはどの程度に出来あがるのかは成果物を手にする迄私には読M めなかった。が、なかなかの出来映えで解像度もまずまず。今一度会場に立戻るつもりで凝視すれば60%は解読できると判定しているが如何なものか。色を決めることは面白くもありむずかしくもA ありで、常に材質とセットでその効果を計算せねばならぬという初歩の初歩で大いに悩んだ。色というものは個人のイメージのなかの生理波長にあり、どの波長をえらぶかは合議の世界であってもG 合議で色そのものは決められず、一つの感性で仕立てあげるものである。会議・展覧会報告書の表紙の色は緑。緑をえらんだことは正解として、その緑にもう少し食いさがるべきだったかと自省。E 円転滑脱とすすんだ展覧会報告書作成だったので、その緑からもう15%黄味を除去した方が良かった等ということはいわぬが花。

■役員会の報告

第9回役員会（'99年1月29日）役員10名出席

- ・実行委員会打ち上げパーティーの収支報告。
- ・展覧会報告集は部数450を印刷。完成次第発送の予定。
- ・事務局運営補助費の見積もり承認。
- ・第17回海外交流の会 日時、内容について決定。
- ・ニューズレターについて新しい編集体制と編集方針を検討。

第10回役員会（99年2月18日）役員8名出席

- ・第12回日本大会の会計の残務について、後日担当者による整理を行う。
- ・大会ビデオについては、ダイレクトメールを発送。試写は次回海外交流の会の前後で行う。
- ・今年度、予定通りもう1号ニューズレターを発行する。

第11回役員会（99年3月17日）役員12名出席

- ・大会ビデオについては、次回海外交流の会で申し込みを受ける。
- ・ニューズレター作成体制について、後日担当者が集まって協議。
- ・来年度総会の場所と講演者について協議。講演者については第1候補として吉田文子さんに交渉することに決定。
- ・千代田区女性センターの情報交流会（日時未定）でUIFA日本大会について報告、合わせて写真展示も行うことを決定。

■「この指止まれ」の報告

東由美子

前回ニューズレターで「翻訳をいっしょにやりましょう」と呼びかけたところ下記の方々が名乗り出ていただきました。

河原 美津子さん  
古村 伸子さん  
中村 陽子さん  
三上 紀子さん  
吉村 康子さん

とりあえず、私を含め6人で始めたいと思います。

3月27日（土）、海外交流の会の前に集まって今後の方針を話合うことにしました。今後定期的に集まる日時等決まりましたら、又、ニュースの誌面でお知らせしたいと思っています。

なお、本のタイトルについては、セクリックさんに問い合わせたところ、

「A SEARCH OF WOMEN IN ARCHITECTURAL THEORY AND PRACTICE」

とのことでした。

途中からの参加もオーケーですから是非声をかけてください。

■ 新シリーズ  
この指とまれ

ハワイのホスピタル訪問のお誘い

渡辺喜代美

婦人科医堂園涼子氏の講話を記憶なさっている方は多いことと思う。堂園氏については「サポート神戸」の医療活動は高く評価され、ホスピタル建築に深い意見をもっており、「インターナショナル・メディカル・クロッシング・オフィス」を開業し、その医院もサロンのような雰囲気。

その堂園氏に相談したところ、コーディネイトを引き受けてくださるといので、ハワイのホスピタル訪問計画を練りたいと思う。訪問先はハワイ・オアフにある「クイーンズ・メディカル・センター」と、コナにある「ノース・ハワイアン・コミュニティー・ホスピタル」。

クイーンズは、ハワイで最大の私立病院で、太平洋地域で指導的な役割をはたす総合医療センター。ノース・ハワイアンは、全米第一の評価を受けたホスピタル。堂園氏は医師として、患者の立場から体験診察を受け、2つのホスピタルを高く評価し交流している。

建築的な考え方と医療の両面に良い感性を持っているというこの2つのホスピタルの訪問は、建築家にとっても良い体験とう。ついでに診察を受ける希望者は堂園氏が相談にのってくださること。言語の障壁も通訳がついて心配ないそうだ。また、ハワイ大学訪問、建築家との交流、はたまたライトの建築もあるというので楽しい企画になりそうだ。

これからの社会が求めるホスピタルとはどのようなものか。おおいに意見を交わしたい。訪問計画に興味を持つ方は、この指とまれ！。 連絡先：渡辺喜代美 TEL. 3409-4732/FAX. 3409-4822



■広報だより

春爛漫 桜満開 4月新年度の始まりです。

UIFA '98日本大会記録ビデオテープ「堂々完成!!」、大会報告書、展覧会報告書、記録ビデオテープの3点セットがこれ又「堂々完成!!」担当の方お疲れ様でした。

“この指とまれ” Newsletter 作りに参画しませんか。

連絡：事務局広報委員会まで  
担当：飯島、川嶋、渡辺、田中、大高、今村